

教育センター

第107号

平成26年 6月

だより

島根県教育センター

〒690-0873 島根県松江市内中原町255-1
TEL 0852-22-5859 / FAX 0852-28-2796
URL http://www.pref.shimane.lg.jp/matsue_ec/
E-mail matsuekyoikusen@pref.shimane.lg.jp

島根県教育センター浜田教育センター

〒697-0023 島根県浜田市長沢町1550-1
TEL 0855-23-6782 / FAX 0855-23-5059
URL http://www.pref.shimane.lg.jp/hamada_ec/
E-mail hamadakyoikusen@pref.shimane.lg.jp

島根県教育センター研究発表会

松江会場は200名以上、浜田会場は100名を超える方々にお出かけいただきました

松江会場

「秋田の学力向上の秘密」

5月17日(土)

～全国学力・学習状況調査6年トップクラスの要因～



秋田大学教育文化学部教授 阿部昇先生

＜秋田県・学力トップクラスの要因を探る＞

学校質問紙、児童・生徒質問紙表結果から、次のことがわかる。

- 秋田の子どもたちも礼儀正しく、積極的で授業態度がまじめである。
- 学校から家庭・地域への働きかけにより、家庭・地域が学校を信頼し、支持する雰囲気がある。
- 家庭での学習習慣も肯定的回答が全国を大きく上回っている。

学力のターニングポイントは「最新の学力観と指導方法である」

＜学校の主な取り組み＞

① 課題解決型・探究型の授業

○秋田の無回答率は全国平均の1/2～1/3であり、B問題の正答率は年々伸びており、全国平均との差がさらに大きくなった。その要因は探究型の授業、特に、考えを示し思考を深める学習、話し合い・意見交換を重視する学習に力を入れている成果ではないかと考える。

○探究型学習のポイントは、内面の外言化であるため、「一人思考、グループ思考、全体思考」の組み合わせを工夫している。

○学習課題に関わる初発問を大切にし、追求場面では子どもたちの考え方を教師が整理することにも留意している。課題解決型・探究型では、めあて、ねらいを明確にして、提示しないと力がつかない授業になってしまう。

この課題解決型・探究型学習がB問題での高い正答率に結びついていると考える。

② 「共同研究」を核にした継続的授業研究システム

教師は専門職である。すべての国民があまねく出会う専門職であり、その人の生き方に関わる社会的責任の重い職である。専門家である教師は、「授業をいつでもどこでも見せられることがprofession」であり、専門職にはトップレベルの研究力と熟練された職人性が求められる。

校内研修の形骸化（一人任せ、ほめ合うだけの研修）を打破し、教師一人一人の技量のアップと研究の共同化の両面を図ることが求められている。

チームで取り組む授業研究システム「事前研究」→「研究会当日」→「事後研究」で行っている。

探究型の授業形態

めあて

課題

一人思考

グループ思考

揺さぶり 意味づけ

全体思考

振り返り

感想

<事前研究：共同化の重要ポイント>

教科を超えた共同研究が実現できるかどうかが鍵

なによりも「事前研究」が研究の成否を決めるため、研究チームの結成に気を配っている。他教科の教員の意見で教材の本質に迫ることも多い。チームで事前研究を行うことにより、授業者以外も我が事意識になり、授業研究の共同化には欠かせない。

ワークショップ型で授業研究することが有効

校内授業研修会の他にも、小中連携授業研修会、地域（市町村）授業研修会など学校を超えた共同研究の充実も求められる。ワークショップ型授業研究では、各グループには事前研究をしたチームの人が分かれて入ることで、事前研究の時に検討したことが伝わる。事後研究会では、ビデオ映像を使い、ストップさせながら研究することを薦める。厳しい批判が出てこそ、事後研究である。



<外部の助言者の活用>

「共同研究」をすすめるに当たっては、研究リーダーの役割が重要である。ここでいう研究リーダーは研究主任を指すのではなく、校長―副校長―教頭―研究主任―教科主任をいう。外部の助言者（指導主事や大学教員等）を生かすことが肝要である。「共同研究」の推進が学力と相関関係があることもわかっている。

このような実践を通して、授業研究の日常化、普段から授業を見ること、見せることの日常化（「密室からの解放」）が図られてきている。それにより、教室で、廊下で、職員室で、授業の話や子どもたちの話題が飛び交っている。

③ 家庭学習ノートの取組

<秋田の特色①> 家庭学習ノートの学校ぐるみでの取組！

宿題は決して多くはなく、自分で計画表をたてさせ、取り組ませる家庭学習を重視している。復習中心であるが、毎日、学校で提出されたノートを見て朱書きを入れている。朱書きの仕方を学びあうための研修も実施している。

<朱書きの入れ方>

- きちんとできている子どもには簡単な朱書き
- 例えば教科が偏っているなど、心配な子どもには多めの朱書き
- 大いに心配な子は補習

<秋田の特色②> 補習は担任任せにしないでチームで対応！

指導の必要な児童生徒には担任ばかりではなく、学年部や専科の教員、必要に応じては教頭も入りチームになって行う。とにかく指導はチームで行うことが大切である。

<秋田の特色③> 家庭への丁寧な働きかけを積極的に！

学力調査結果をもとに今後の学校の学力育成の方針を説明し、協力を依頼している。学級通信も多く出し、学校が家庭、地域との結びつきを大切にしている。家庭や地域への働きかけにより学校への信頼を得ている状況である。

校長の中には、「卒業するまでに家庭学習ができる子どもを育てる」を教育目標にしている者もいる。

100分の講演時間があっという間に過ぎてしまいました。

詳しい内容をお知りになりたい方は、DVDの貸し出しを行っておりますので島根県教育センター研究・情報スタッフ（TEL 0852-22-5873）までお問い合わせください。

研究発表会

今年の発表は、教育センターの研究に加え、島根大学大学院教育学研究科を修了された先生にも発表していただきました。昨年度、本センターで長期研修をされた2名の先生からは、自らの課題に対し、真摯に研究を進めてこられた成果を発表いただきました。

本センターと浜田教育センターにおいて、昨年度も共同して鋭意研究した成果を発表しました。参加いただいた方から研究に対する高い評価をいただきました。

特に、教育相談スタッフの2本の研究で作成した「授業実践ファイル」、「授業づくりリーフレット」、「学級集団づくり魅力ガイドブック」は、学校において、すぐにも活用いただけるようにと工夫しました。



ICT体験・展示会

ホームページにも掲載し、見たいページが見られるように工夫しています。是非、教育センターのホームページをご覧ください、ご活用ください。

研究発表の他、昨年度から設けている「体験コーナー」を引き続き、今年も作りました。今年度は、授業づくりや研究についての相談コーナー、ICT校内研修パック体験コーナーと「何とか学校や教職員の皆さんへの支援になる」と考えて作りました。多くの企業等のご協力もいただきました。

浜田会場

「子どものつまずきの背景と指導のあり方」

5月24日(土)

関西国際大学教育学部教育福祉学科教授 中尾繁樹先生

**特別支援教育とは障がいの有無にかかわらず
すべての子どものためにすべての教員がかかわる教育である**

① 「臨機応変」

特別支援教育とは障がいの有無にかかわらずすべての子どものためにすべての教員がかかわる教育である。一人一人の子どもが「わかる、できる」ようにするために子どもの実態を把握し、つまずかないように配慮、工夫する予防教育である。

教師の「プロたる所以」を4文字熟語で言うと「臨機応変」さである。指導案は十分な子どもの実態を把握した上で自らの指導観をもって書くものであるが、その指導案も実際の授業では、子どもたちの反応や様子を見て指導や流れを変えていくのが当然である。

学習定着率をみる「Learning Pyramid」では、話を聞いているだけでは10%も定着しないが、他の人に教えると言う経験をするると90%の定着がみられるという。授業のはじめに、「1分間で昨日、学習したことをお互いに話し合ってください」というペアワークを取り入れ、子どもたちの脳を覚醒させてから授業を始めることもできる。

人は両眼視できないとうまくキャッチボールができない。子どもたちの中には「水」という字を「つ1く」とみていてうまく書けない子もいる。話すスピードにも配慮が必要である。小学校1年生で1分間に250文字なら聞きとれることを知っていれば話し方がわかり、学年相応のスピードで話すことを意識するようになる。指導者がそのことを理解して指導し、児童生徒に応じて臨機応変さを持ち合わせた対応を心がけることが必要である。



② 行動の背景とその必然性

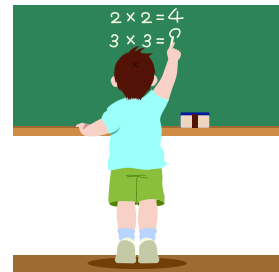
子どもたちが「わかる、できる」ように指導を工夫、配慮していくためには、子どもたち個々の行動や認知の仕方の理解が不可欠である。

子どもの実態把握は子どもを観察することから始まる。「なぜ、この子どもはこうするのだろうか」とその子どもの行動の背景をさぐり、その行動の必然性がわかれば、その子の実態に応じた指導のあり方を考えなくてはならない。だからこそ、子どもについての情報を様々な角度から収集することが大切である。子どもが育ってきた歴史を理解・想像し、学校や幼稚園・保育所等で受けてきた指導のプロセスを調査する中から、効果的な指導のヒントをさがすこともできる。さらには、子どもたちが困っていることに耳を傾け、願いを聞くことも大切である。つまり、子ども理解は多様化理解である。

③ 子どもたちの実態がわかると授業が変わる！

<教育環境の構造化>

まずは、目で見て理解できる(可視化)環境をつくる。教育環境の構造化である。具体的には、教室の掲示や物を置く場所、机の位置を工夫、配慮するだけで子どもたちには教室や授業が快適になる。教室の前面には、子どもたちと一緒に決めたクラス目標が掲示されることが大事である。



<授業の構造化>

○学習準備の仕方

右利きと左利きではノートと教科書の置く位置は反対になる。

○板書の形を決める

黒板のどの位置に「めあて」「学習課題」「まとめ」等を書くか決める。

○わかりやすい説明・指示

「今、何をするのか」や「何を考えるのか」が明確になり、子どもの学ぶ意欲を高めることにつながる。「あれ、これ」とか「ちゃんと、きちんと」という言葉を使いがちだが、これでは伝わらない。具体的に示したり、視覚的に補ったりする必要がある。

○机間巡視

ピンポイントで困っている子どもの所に行って明確な指導、指示を短時間で行う。

(当然、困っている子どもを見抜く眼力、実態把握が必要)

④ 配布資料より

子どもたちは一定のルールの下で、自分を安心させ、お互いに認め合うことができる。認め合い、支え合う学級集団づくりのために、ルールの必要性の理解と定着のための取組から始める。

<学級経営で大切にしたいこと>

- 行動に対して評価をする場所
- 些細なことでもほめる、認められる場所
- 居心地のいい場所、存在感のある場所



<学級経営で人間関係作りを学ぶ機会や場を積極的に設ける>

子ども同士の関わり合いを確立するには、子どもと教師の信頼関係を基盤としながら相互をつなげていくことが大切である。個の特性に応じた指導・支援を行うとともに、学級全員で友達への望ましい関わり方を学習する機会や場を設け、学習集団としても人間関係づくりのルールやマナーを身につけていくことが求められている。

『困った子』ではなく『困っている子』。この言葉の違いこそ、子ども理解の原点である。

- 子どもの行動の必然性をわかろうとする
- 子どもの生活背景を理解しようとする
- 子どもがしていること「それくらいできてあたり前」でなく、認め、ほめる
- 子どもの願いを知り支援する

「理解のない指導はなし」といいます。その子理解に基づいた具体的な指導ができてこそ教師であると説かれたように思いました。「児童生徒の最大の教育環境は『教師』である。」改めて、この言葉を想起した研究発表会でした。

講演の前の研究発表で、島根県教育センターの教育相談スタッフが、作成した「授業実践ファイル」「授業づくりリーフレット」及び「学級集団づくり魅力ガイドブック」について発表をしました。その中で、教職員が協働して、子ども同士が互いを理解し「かかわる力」を育てていく「魅力ある、やりがいのある」学級集団づくりについて、また、特別支援学級の授業づくりの研究を通して、子ども理解のもと、できる・わかる手立て、環境調整の手立て等教師の役割について提言を行いました。中尾先生の講演内容と二人の提言がつながっていると感じられるものでした。中尾先生の講演内容を詳しくお知りになりたい方は、DVDの貸し出しを行っておりますので島根県教育センター研究・情報スタッフ (TEL 0852-22-5873) までお問い合わせください。

研 究 発 表 会

今年度は、新たな試みとして邑南町立石見中学校から県教研の優秀論文の概要を発表していただきました。5年間にわたり、鋭意研究を進めてきた図書館活用教育について、「気軽に利用でき、生徒の力が育つ図書館 ～本がたつなく 人・ひと・人」と題して発表いただきました。同校は本県の先進校として大きな成果を上げられています。

また、昨年度、浜田教育センターで1年間研修された3名の先生の発表の他、浜田教育センターの共同研究「島根県のキャリア教育推進に関する一研究(1年次)」について発表しました。研究でまとめた「発達段階で育てたい力」は第2期の教育ビジョン21でも参考として取り上げられています。

研究会で発表いただいた皆さん、ご協力いただきましたすべての皆さんに感謝申し上げます。

教育センターだよりは、島根県教育センターのHPでご覧になれます。ダウンロードしてご利用ください。